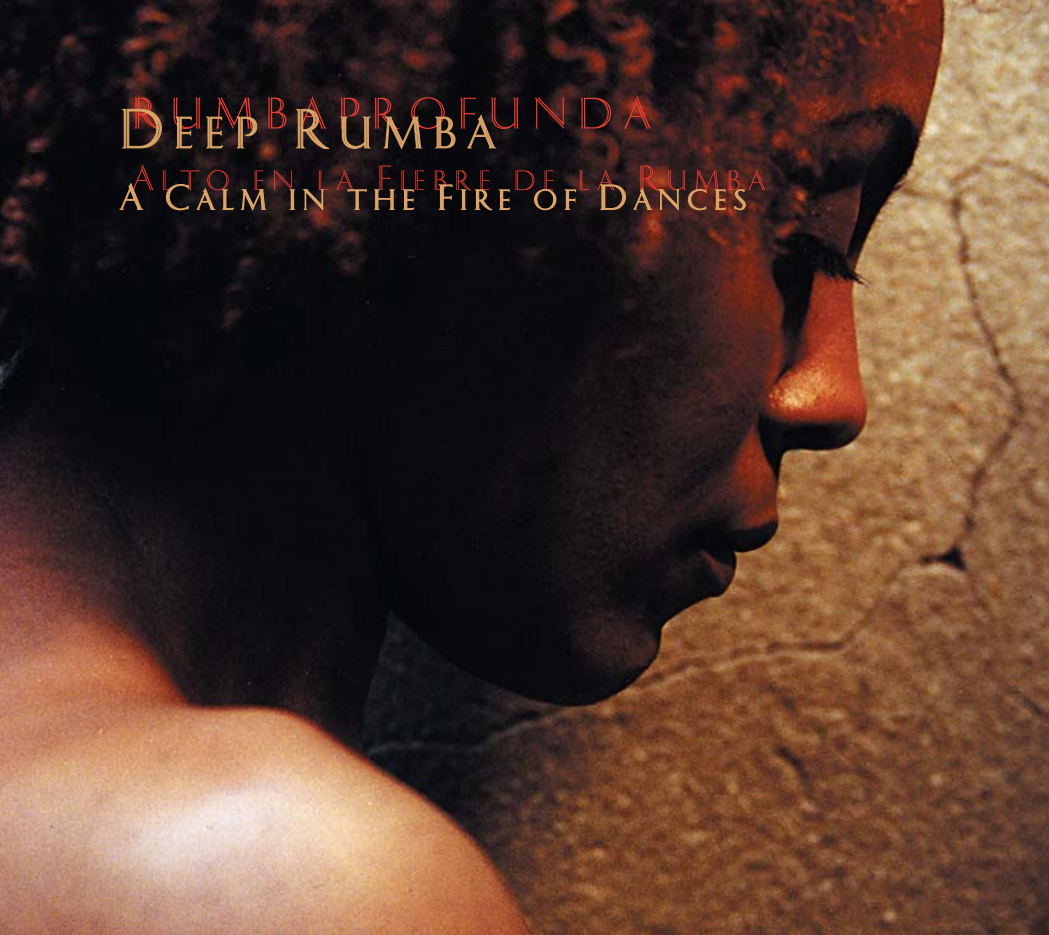




RUMBA PROFUNDA
DEEP RUMBA

ALTO EN LA FIEBRE DE LA RUMBA
A CALM IN THE FIRE OF DANCES



Cubana (Charles Neville)

Charles Neville - tenor sax

medley: Robby and Negro Opening Time / Pensamiento

(Robby Ameen, Horacio Hernandez / DR)

Robby Ameen - trap drums; El Negro Horacio Hernandez - trap drums;

Richie Flores - congas; Paoli Mejias - congas; Xiomara Laugart - lead voice;

Alfredo Triff - violin; Charlie Flores - electric bass

bom bom bom bom (DR)

Puntilla Orlando Rios - lead voice; Abraham Rodriguez - clave, coro;

Robby Ameen - trap drums; Roman Diaz - cojones;

Richie Flores - congas; Paoli Mejias - congas

Prelude to Un Golpecito Na' Ma (Horacio Hernandez)

El Negro Horacio Hernandez - trap drums; Giovanni Hidalgo - congas;

Robby Ameen - trap drums; Puntilla Orlando Rios - voice; Xiomara Laugart - voice

Kip Quest (Giovanni Hidalgo)

Giovanni Hidalgo - congas

Quimbara 2000 (DR)

Andy Gonzalez - bass, coro; Amadito Valdez - timbales; Richie Flores - congas, coro;

Paoli Mejias - congas; Haila Monpie - lead voice; Xiomara Laugart - coro;

El Negro Horacio Hernandez - trap drums; Robby Ameen - trap drums;

Kip Hanrahan - coro; Charles Neville - tenor sax

Charles and Andy discuss the Science of Voodoo and the Voodoo of Science

(Charles Neville, Andy Gonzalez)

Charles Neville - tenor sax; Andy Gonzalez - bass; El Negro Horacio Hernandez - keys

Beseme Mucho (Consuelo Velasquez)

Xiomara Laugart - voice

Tradicion (Geraldo Alfonso)

Robby Ameen - trap drums; Xiomara Laugart - voice;

Giovanni Hidalgo - congas; Alfredo Triff - violin

Sugar and Cotton (Black Hands in White Labor) (Horacio Hernandez)

El Negro Horacio Hernandez - sticks, trap drums, congas;

Robby Ameen - trap drums, congas; Giovanni Hidalgo - sticks, congas;

Charlie Flores - electric bass; Pederito Martinez - lead voice

Cantar Maravilloso (DR)

Puntilla Orlando Rios - voice; Abraham Rodriguez - clave, coro; Romon Diaz congas;

Richie Flores - congas; Paoli Mejias - congas; Robby Ameen - trap drums

Giovannito (Giovanni Hidalgo)

El Negro Horacio Hernandez - sticks; Giovanni Hidalgo - congas

Arabian Nights (Charles Neville, Kip Hanrahan)

Charles Neville - tenor sax; Andy Gonzalez - bass; El Negro Horacio Hernandez - trap drums;

Robby Ameen - trap drums; Paoli Mejias - congas; Richie Flores - congas

Solo Nino

Puntilla Orlando Rios - voice; Abraham Rodriguez - clave, coro; Romon Diaz congas;

Richie Flores - congas; Paoli Mejias - congas; Robby Ameen - trap drums

Yambu de las Cocas

Andy Gonzalez - bass; El Negro Horacio Hernandez - trap drums; Robby Ameen - trap drums;

Richie Flores - congas; Paoli Mejias - congas; Xiomarra Lougaurt - voice; Alfredo Triff - violin

Work and Play (Real Life Dramas) (Horacio Hernandez, Robby Ameen, Giovanni Hidalgo)

El Negro Horacio Hernandez - voice, sculptures; Velibor Pedevski - voice; Robby Ameen - sculptures; Giovanni Hidalgo - sculptures

Kip Hanrahan - musical director

DEEP RUMBA

RUMBA PROFUNDA

A CALM IN THE FIRE OF DANCES
ALTO EN LA FIEBRE DE LA RUMBA



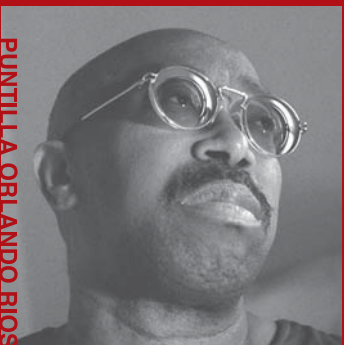
AMADIO VALDEZ



ANDY GONZALEZ



ROBBY AMEEN



PUNTILLA ORLANDO RIOS



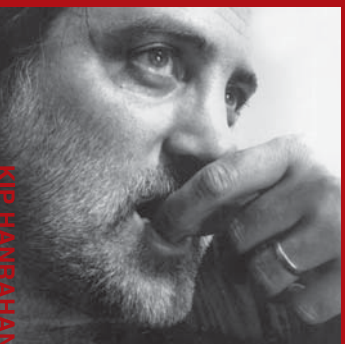
EL NEGRO
TORACIO HERNANDEZ



PEDERITO MARTINEZ



HAILA MONPIE



KIP HAMBRAMAN



XIOMARA LAIGART



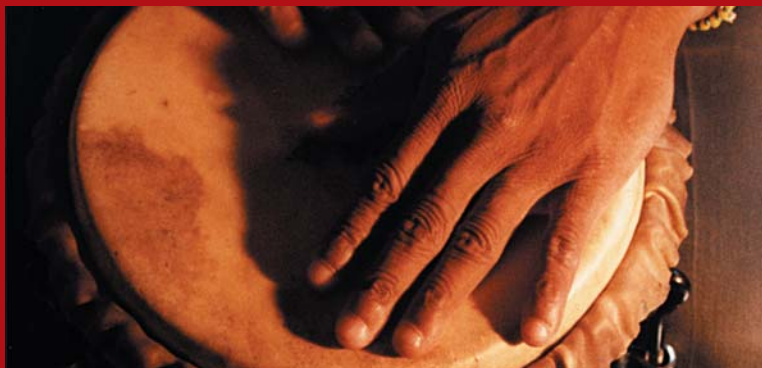
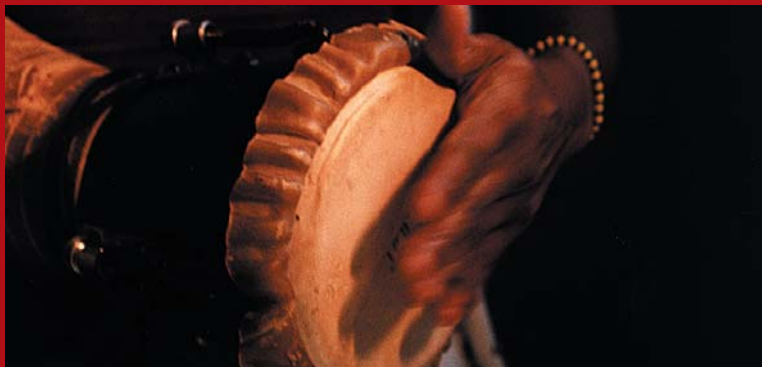
ROMAN DIAZ



ALFRED TRIFE



CHARLES NEVILLE



ディーブ・ルンバ

『ア・カーム・イン・ザ・ファイア・オブ・ダンスス』

ー 聞こえない音と身体の入口として

東 琢磨（音楽評論家）

1998年に録音・発表された、ディーブ・ルンバ『ディス・ナイト・ビカムス・ア・ルンバ』に続く第二弾となる本CD『ア・カーム・イン・ザ・ファイア・オブ・ダンスス』は、前作と比べて聞くと、ディーブ・ルンバというユニットが、常に生成途上であることを実感させる録音となっている。前作発表後のツアーを経ての録音であり、本作では、1999年、2000年の来日時の演奏パターンに近い録音も聞くことができる。

ディーブ・ルンバという空間

ディーブ・ルンバは、オラシオとロビーの双頭ユニットであり、ミュージカル・ディレクターといってもいいポジションにキップがいる。とはいえ、この三人は常に「中心」ににいるというわけではなく、「場」を用意するだけの存在であったり、強度を保証する全体の靱帯としての役割のみを果たしているかのようであったりする。

ニューヨーク、キューバ、プエルトリコ、さらにニューオリンズから集められたミュージシャンたちは、まるで星座のように配置され、彼らのポジショニングや光度がメンバーによって異なる度に、他なる星座に即座に妥容して

いくし、同じセットのステージのなかでも、誰がメインのアクトとしてパフォーマンスするかも、その星座のかたちは変わっていく。この自在さをも構造と呼ぶのであれば、私たちは他なる思考をもって考えなければならないのかもしれない。

「星座」というメタファーでもって、ディーブ・ルンバの演奏者たちの構造を説明してみたが、サルサのようなタイプの音楽ももともとこうした構造を持っていたのだが、商業化の過程のなかで、歌手やプロデューサーを頂点とするヒエラルキー的な（他のポピュラー・ミュージックと同じような）構造へと変化していった。秋吉敏子との共演もあるリッチー・フローレスは、ディーブ・ルンバという星座のなかで、時折、最も強い輝度を放つパーカッショニスト（「世界最速のコンゲーロ＝コンガ叩き」というキャッチを持っている）であるが、ロックからサルサまでのさまざまジャンルでの超売れっ子のセッションマンでもある。彼は端的にこんなことを言っていた。「サルサでは決まりきったことしかできなくなっているが、ディーブ・ルンバは自由にやりたい放題なので最高なんだよ」。

ルンバという音楽文化は、コミュニティに、ストリートや広場に、あるいはセミパブリックスペースといってもいい中庭に密着した身体技法でもある。ここで、「音楽」といわずに「音楽文化」としたのは、自律した（聴覚）芸術ジャンルといった意味合いでの「音楽」ではなく（／でもあるにとどまらず）、生活と、ダンスと、コミュニケー

ションと不可分な「音楽」であるからだ。ルンバとは、暮らしの様式であり、パソコンやネットや英会話などとは異なる「コミュニケーション」の手段であり、ここでルンバは音と声の束であると同時にダンスの様式でもある。

しかし、一方で、リッチーがいうところの「自由」とは、高度に緊密なルールやテクニックをクリアしたうえでのものであることにも注意を向けておきたい。「クラーヴェ」というリズム自体が、実はほんとうは音になっていないリズムであり、複数の厳密なルールのうえで叩かれるパーカッションの音のあいだから、聞こえてくる／生み出されてくる「ノリ」であるのと同じように、むしろ、過剰といってもいいディープ・ルンバの音響空間は、聞こえてくるのとは違う音を生み出す空間としても機能している。

サンテリアという認識システムとルンバ

それはどういふことなのか。アメリカン・クラーヴェの最初期の作品に、ミルトン・カルドーナ『ベンベ』がある。キップ・ハンラハンが自らが生まれ育ったニューヨークという「地元」を「キャラバン」していくうえで大きな注意と愛着を払ったと考えていいサンテリアの儀礼音楽集である。詳しくは『ベンベ』ライナーノートも参照願いたい。ルンバは世俗の音楽でありながらもサンテリアという認識システムと密接な関係性を持っている音楽文化でもある。

ディープ・ルンバの二作目にあたる本作では、ニューオ

リンズ出身でニューヨーク在住のチャールズ・ネヴィルが招かれている。サクソという楽器の音が入るだけで、ディープ・ルンバの音響空間が、一作目とはかなり異なった広がりや密度のものとなったことは、一聴、端的に明らかだろう。

彼の兄弟たちは、ニューオリンズで最も有名なファンク／ヴォーカル集団であるネヴィル・ブラザースとして活動しているし、『コンジュア』などのアメリカン・クラーヴェの諸作で重要な役割を果たすレオ・ノセンテリは、そのネヴィル・ブラザースの前身ともいべきミーターズで活躍してきた名手でもある。アメリカン・クラーヴェが、ニューヨークのサウスブロンクスを拠点としながらも、その都市空間のなかの「南」の飛地(=enclave／en-claveというニューヨリカン表現によりこの「飛地」を「クラーベのなかで／によって発生していくものという再定義化をおこなったのはブルトリカンの詩人タト・ラビエリである)をキャラバンしながら、不可視の複数のルーツroots／ルートroutesの交錯を見つけ出し、さらに齟齬や衝突も含めての交流の場を作り出していく。不断の装置であるとすれば、ディープ・サウス、ニューオリンズも最重要なアクターとなってくるのは至極当然のことでもある。」

そうしたアメリカン・クラーヴェという場のなかでのひとつのヴァリエーションとしても仮設されたディープ・ルンバとは、不安定ながらも強度に貫かれた空間でもある。高度で緊密なルールとテクニックに基づきつつ、複

数のパーカッションスト／ドラマーたちが自由自在に動き回っているかのようなディーブ・ルンバという空間を常に一定のリズムで分節化して空間としての最終的なフレームを作り出しているのは、ベーススト、アンディ・ゴンサレスであるといってもいいかもしれない。

ニューオリンズから来た男チャールズと、サウスブロンクスにありながら膨大なアナログ盤のアーカイヴを通して時一空、両方の意味で遠いキューバに耳を澄ませてきたアンディが「会話」を繰り広げるのが、「ヴードゥの科学と科学のヴードゥ」について、チャールズとアンディが対話する」（以下、「ヴードゥ／科学」）とタイトルされたトラックである。キューバのソン「キンバラ」、同じくルンバの「ボン・ボン・ボン」、メキシコのボレロ「ベサメ・ムーチョ」といったカリブや汎ラテンアメリカのスタンダードや、アフロ・キューバン／アフロ・カリビアン色の強いオリジナル・トラックに混ざってのいくつかのブリッジの役割を果たすトラックが本アルバムにはある。「シュガー・アンド・コットン（白い労働のなかの黒い手）」「アラビアン・ナイツ」「ワーク・アンド・プレイ（直接的に「労働と遊び」と日本語にした方がいいだろう）」と、この「ヴードゥ／科学」がそれにあたる。これは、演奏の中身であったり、あるいはタイトルがそうであったりするのだが、なかでも「ヴードゥ／科学」は異彩を放っている。

クラーベス（クラーヴェのビートを刻む楽器としての拍子木を「クラーベス」という）とアンディのベースのつばやきに乗って、チャールズのサックスが語り始める。

言葉のない対話で語られているのが、ヴードゥと科学について。ここでの「ヴードゥ」とは、さんざん西欧近代的なオリエンタリズムのステレオタイプで痛めつけられてきた迷信＝ヴードゥであり、「科学」とは決めつける権力の装置である。サンテリアと同系統の信仰システムといてもいいヴードゥを取り上げているのは、ニューオリンズがUSAのなかで持っている複数の異なる異物性のひとつに、やはりヴードゥと同系統の「フドゥ」の地でもあるがゆえでもあるが、宗教／信仰、あるいはスピリチュアリズム（聖性をめぐる思考）でもあり、他なる認識システムである、サンテリアやヴードゥと「科学」を対置させる試みとしても機能している。サイドを敬愛するキップや、近い関係にあるロビーとしては、こうした認識システム（ディーブ・ルンバという音響空間の組織実践自体がそのシステムで構築されている）と「アラビアン・ナイツ」は分節されたものとしてあるわけだし、カリブ（＝シュガー）とコットン（＝ディーブサウス）は、白い労働システムのなかでの「黒い手」の実存によって接続される。

ディーブ・ルンバという仮設空間は、アメリカン・クラヴェのなかでのイシュメール・リードの『コンジュア』などの他の仮設空間とも密接な関係のなかにあるし、さらにさまざまな他の空間／場へと無数のブリッジとしても機能している。この一枚のディスクに過剰に溢れる音の歎びに身を任せながら、実は私たちはここでは聞こえていない他なる無数の音や身体との関係性への入口にも立っているのだ。



このファイルを、著作権法で認められている著作権者の許諾を得ずに、賃貸業に使用すること、個人的な範囲を超える使用目的で複製すること、ネットワーク等を通じてこのファイルに収録された音を送信できる状態にすることを禁じます。

american clavé



reissued by american clavé and east works entertainment inc. www.ewe.co.jp

american clavé



KIP HANRAHAN - PRODUCER, MUSICAL DIRECTOR

EL NEGRO HORACIO HERNANDEZ, ROBBY AMEEN, PUNTILLA ORLANDO RIOS - MUSICAL CO-DIRECTORS
RECORDED AND MIXED IN SORCERER SOUND STUDIOS, NEW YORK, DECEMBER 1999 THROUGH APRIL 2000

ION FAUSTY AND DICK KONDAS - RECORDING AND MIXING ENGINEERS

MASTERED AT STERLING SOUND STUDIOS, NEW YORK, MAY 2000

PHOTOS BY RITCHARD RODRIGUEZ, JUN ABE, KEISUKE FUKAMIZU AND TORU SAKAI

ORIGINAL COVER DESIGN BY CAPOEIRA GRAPHICS

FRONT COVER - XIOMARA LAUGART

CD PACKAGE BACK - EL NEGRO HORACIO HERNANDEZ, PUNTILLA ORLANDO RIOS